

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 15 Jimmy Smith【ジミー・スミス】 ～オルガン・ジャズのパイオニア～

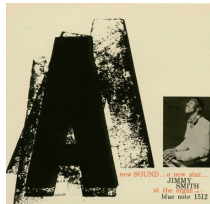


写真提供：EMIミュージック・ジャパン

Profile

1925年12月8日、ペンシルバニア州ノーリスタウンで生まれる。本名はジェームス・オスカー・スミス。ピアニストであった両親の影響で、幼くしてピアノを習ったスミスは、9歳の頃にラジオ番組のアマチュア・コンテストに出場し入賞。40年代初頭には父親とタップ・ダンス・デュエットを組んでナイト・クラブに出演し人気を呼んだ。正規の音楽教育を受けたのは海軍除隊後の48～50年にかけて、ハミルトン音楽学校でベース、オースティン音楽学校でピアノを習い、その他にもギターやドラム等も学んだ。51年頃から Hammond オルガンを弾き始め、翌52年にドン・ガードナーのグループでジャズ・ピアニストとしてプロ活動を開始。53年から名手 Wild Bill Davis の演奏に刺激され、ピアノからオルガンに転向。その後2年間、昼夜オルガン奏法の練習に没頭した挙句、独自のオルガン奏法の秘訣であるフット・ペダルをマスターすると、55年には満を持して自己のオルガン・トリオを結成。その後の活躍は周知の通りであるが、Blue Note の看板アーティストの一人として活躍すると共に Verve や自己のレーベルである Mojo に多くの録音を残す。62年には、ジャズの作品で初めてビルボード・チャートにランクイン（『ミッドナイト・スペシャル』がアルバム・チャートで28位、同名シングルがシングル・チャート69位）させるという快挙を成し遂げた。オルガン・ジャズの第一人者として、オルガンという楽器をモダン・ジャズの世界に持ち込み、その存在を他の楽器に並ぶ花形ジャズ楽器にまで高めた功績は計り知れない。弟子にはジャック・マクダブやジミー・マクグリフ等がいる。2005年2月8日アリゾナ州スコッツデールの自宅で死去。享年79才。

オルガン・ジャズの夜明け〜記念すべきデビュー作!



ア・ニュー・サウンド・ア・ニュー・スター ジミー・スミス・アット・ジ・オーガン VOL.1 ジミー・スミス

(EMIミュージック・ジャパン:TOCJ-9180)

ジミー・スミス (org)、
ソーネル・シュワルツ (g)、
ベイ・ペリー (ds)

1. ザ・ウェイ・ユー・ルック・トゥナイト
2. ユー・ゲット・チャ
3. ミッドナイト・サン
4. レディ・ビー・グッド
5. ザ・ハイ・アンド・ザ・マイティ
6. パット・ノート・フォー・ミー
7. ザ・ブリーチャー
8. テンダー
9. ジョイ

ジミーのソウルフルなヴォーカルも炸裂する隠れ名盤!



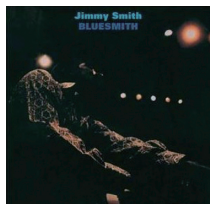
ステイ・ルース ジミー・スミス

(ユニバーサル・ミュージック:UCCV-3031)

ジミー・スミス (org, vo)、トム・マツ
キントツシュ (arr, cond)・オーケストラ、
スタンリー・タレンタイン (ts)、フィル
・アプチャーチ (g)、ジミー・メリッ
ト (b)、グラディ・テイト (ds)、他

1. アイム・ゴナ・ムーヴ・トゥ・ザ・アウトスクーツ・オブ・タウン
2. ステイ・ルース
3. イフ・ユー・エイント・ガット・イット
4. ワン・フォー・メンバース
5. イズ・ユー・イズ・オー・イズ・ユー・エイント・マイ・ベイビー?
6. チェイン・オブ・フールズ
7. グラビング・ホールド

ど真ん中のオルガン・ジャズが最高! Verve時代の傑作!!



Bluesmith Jimmy Smith

(Lilith: Import / USA)

Jimmy Smith (org)、Ray Crawford
(g)、Teddy Edwards (ts)、Victor
Pantoja (cong)、Leroy Vinnegar
(b)、Donald Dean (ds)

1. Straight Ahead
2. Absolutely Funky
3. Lolita
4. Mournin' Wes
5. Blues For 3+1
6. Bluesmith

Mr. オルガン・ジャズ

ジミー・スミスが登場するまでは、ジャズ・シーンにおけるオルガンの役割は単なるピアノの代用楽器程度に過ぎなかった。エロール・ガーナー等と同様に、楽譜が読めなかったと言われるジミーだが、その抜群の記憶力と優れた聴覚を持ち合わせ、フット・ペダルによりベース・ノートに刻み独自の演奏スタイルの確立と感情の抑制と発散のコントラストを巧みに表現することで、ソウルフルでダイナミックなオルガン・ジャズの可能性を無限に広げた。ジミーが繰り出すファンキーでグルーヴ感溢れるオルガン・サウンドは、幼い頃に習ったタップ・ダンスやオルガン以前に学んでいたベースからの影響が大きいのだろうが、一人倍の努力に優るものはない。オルガンを手に入れる前は、自宅の倉庫に籠って紙の上に書いた鍵盤でひたすらイメージ・トレーニングに励んだというエピソードも残されている。まさにオルガン・ジャズのパイオニアだ。

ソーネル・シュワルツ (g) とベイ・ペリー (ds) とのオルガン・トリオによるジミーの「ブルーノート」レーベルからのデビュー作品! 録音は1956年2月。驚愕と言っても過言ではないほどの類稀なるジミーの才能もさることながら、オープニングを飾るドライブ感に満ち溢れた「ザ・ウェイ・ユー・ルック・トゥナイト」を聴いただけでも、その革新的で攻撃的なオルガン・サウンドに圧倒されるはず! さすがに「ブルーノート」レーベルの創設者であり名プロデューサーのアルフレッド・ライオンと名エンジニアのルディ・パン・ゲルダが手掛けた作品だけあって大ヒットを記録し、この一枚によってオルガン・ジャズの歴史が切り拓かれ、その後ロックがオルガンを導入するきっかけにもなった。

ヴォーカルも披露した1966年のヒット作『ガット・マイ・モジョ・ワーキン』と、空手着でポーズをキメる斬新なジャケットでも話題になった翌67年の作品『リスペクト』の2作品のコンセプトを合体させた強力盤として登場したのが本作で、録音は1968年。トム・マツキントツシュ・オーケストラとコンボをバックに自慢のオルガンだけでなく、ヴォーカリスト顔負けのソウルフルな歌声も惜しげもなく披露し、『リスペクト』を凌ぐほどの斬新さを誇る宇宙服を身にまとい大気圏で遊ぶようなジャケットだけでも楽しめるが、内容も期待と想像以上! お気に入りには「ステイ・ルース」と「グラビング・ホールド」。アレサ・フランクリンの大ヒット・ナンバーで女性コーラスも配した「チェイン・オブ・フールズ」も最高!

録音はジミーの人気ライブ盤『Root Down』と同年の1972年9月11日。ファンキーなジミーのオルガンとティディ・エドワーズの洗ったテナーがバンドを引っ張り、ブルース・フィリング溢れるレイ・クロフォードのギターもカッコいい。ベースは本誌『The Walker's』由来のリロイ・ヴィネガーだ! 文字通り「Straight Ahead」なオルガン・ジャズで幕を開け、続くリロイ自慢のウォーキングがじっくりと味わえる「Absolutely Funky」。ウィクター・パントーヤのコンガをフィーチャーした「Lolita」に、ウェス・モンゴメリーに捧げるべくレイ・クロフォードのギターがフィーチャーされた「Mournin' Wes」。必殺のソウル・ジャズ「Blues for 3+1」から、とろけるほどブルージューンな「Bluesmith」まで文句なし!

With Michael Jackson

マイケル・ジャクソンが1988年に放った大ヒット・アルバムで、全米チャートで2週連続1位を記録した『Bad』からのセカンド・シングル「Bad」の中で流れるハモンド・オルガンのソロは、何を隠そうジミー・スミスが弾いているのだ。ぜひ一聴を!

ジミー・スミスの愛弟子

ジミーから直接指導を受けた数少ないミュージシャンの中に、日本人がいる。人気TV番組「11PM」でデビューし、NYハーレムで東洋人初のバンド・リーダーをつとめ、1991年にはNY市長より「Best Of Artist Of The Year NY」賞を受賞するなど、本場のジャズ・ミュージシャン達との共演は勿論、リーダー作は24枚に及ぶ。世界が認めるジミー直系のオルガン・ジャズを継承するその男の名は KANKAWA (Blue Smith) だ。